

# Nyāyabindu およびその註釈書における parārthānumāna の研究序説

児 玉 瑛 子

## 1 はじめに

Nyāyabindu は、ダルマキールティ (Dharmakīrti, 七世紀頃) が著した仏教認識論・論理学に関する小論である。その章構成にしたがえば、ダルマキールティの認識論・論理学は、知覚 (pratyakṣa), 自己のための推理 (svārthānumāna), 他者のための推理 (parārthānumāna) という三つの領域に大別できる。仏教認識論・論理学については国内外で多くの研究が行われているが、本稿で扱う他者のための推理は、知覚や自己のための推理と比べてあまり研究が進展していない領域である。後述するように、Nyāyabindu は長い研究の蓄積があるにもかかわらず、他者のための推理を説く第三章の内容を体系的に整理した研究はこれまで行われてこなかった<sup>1)</sup>。こうした背景をふまえ、本稿では、筆者が現在取り組んでいる Nyāyabindu およびその註釈書を主要資料とした、他者のための推理研究の概要および進捗を報告する。その中で、先行研究の状況や、現在参照可能な一次資料の情報をまとめ、他者のための推理研究の課題を明確にしたい。

## 2 ダルマキールティの主要な著作と 他者のための推理

仏教論理学の大成者と称されるダルマキールティは複数の著作を残した

が、特に重要な文献として *Pramāṇavārttika* と *Pramāṇaviniścaya* が挙げられる<sup>2)</sup>。その前提となる体系を作り上げたのは、仏教論理学の祖と言われるディグナーガ (Dignāga, 六世紀頃) である。ダルマキールティの初期の作品である *Pramāṇavārttika* は、ディグナーガの主著 *Pramāṇaviniścaya* の註釈書として著された。それに対し、ダルマキールティ自身の学説をまとめた著作とされるのが *Pramāṇaviniścaya* である。そして、本稿でとりあげる *Nyāyabindu* は、*Pramāṇaviniścaya* の内容を初学者向けに簡潔にまとめたものと位置づけられる。

*Pramāṇaviniścaya* と *Nyāyabindu* は、いずれも知覚、自己のための推理、他者のための推理を主題とする三つの章からなる。こうした章構成の背景については、*Nyāyabindu* 冒頭の著作要件を確認しておきたい。

samyagjñānapūrvikā sarvapuruṣārthasiddhir iti tad vyutpādyate. (NB 1.1)<sup>4)</sup>

人間の目的のあらゆる達成は、正しい認識を前提としている。よって、それ（正しい認識）が詳しく説明される。

このように、*Nyāyabindu* 1.1 は、この作品が「正しい認識」を説くために著されたことを示している。その正しい認識については、周知のとおり、仏教論理学派は二種を認める。*Nyāyabindu* も例外でなく、正しい認識には知覚と推理という二種があり (NB 1.2-3<sup>5)</sup>)、さらに推理には自己のための推理と他者のための推理という区別があること (NB 2.1-2<sup>6)</sup>) を述べる<sup>7)</sup>。

三つの正しい認識のうち、知覚は認識論、二つの推理は論理学を主題とする。自己のための推理章では論理そのものが問題とされ、主に論証因の定義や分類が論じられる。それに対し、他者のための推理では、その論理をどのように表現するかという言葉の問題、つまり論証式やその構成要素が主に扱われる。現在、インド論理学を対象とする研究は国内外を問わず無数に存在し、特に日本の仏教論理学研究においては、国際的に見ても非常に多くの成果が蓄積されている。しかし、ダルマキールティの他者のための推理は、一部の題材を除き、あまり研究が進んでいない領域である。

これまでダルマキールティの論理学研究においては、論証に際して最も重要な論証因の解明が重視されてきた。また、他者のための推理を理解するためには、先行する知覚と自己のための推理に関する議論をふまえる必要がある。他者のための推理研究が他の領域に比べて進展していない要因については、そうした内容上の問題ももちろん想定されるであろう。しかしそれだけでなく、資料上の制約もいくつか存在する。

第一には、*Pramāṇavārttika* 第四章（＝他者のための推理章）が未完であるという点が挙げられる。当該章は全 285 偈<sup>8)</sup> からなるが、中途半端なかたちで議論が終了される。*Pramāṇaviniścaya* および *Nyāyabindu* の第三章と比較しても取り扱われない題材があり、ダルマキールティの他者のための推理を体系的に理解するための最適な資料とはいえない<sup>9)</sup>。

その場合、次に参照すべきは *Pramāṇaviniścaya* であるが、この文献は 2007 年 (Chapter 1-2: STEINKELLNER 2007) と 2011 年 (Chapter 3: HUGON and TOMABECHI 2011) にサンスクリット語校訂テキストが出版されるまではチベット語訳しか参照することができなかった。それより約一世紀早くサンスクリット語資料による研究が始められた *Pramāṇavārttika* や *Nyāyabindu* と比べて、翻訳研究は途上であると言わざるを得ない<sup>10)</sup>。

最後に、単純な量の問題がある。他者のための推理に属する各概念には、非常に多くの下位分類が設定されている。そのため、当該章は知覚章や自己のための推理章と比べて非常に分量が多い章となっている。*Pramāṇaviniścaya* では、第一章と第二章を合わせて校訂本 101 ページ分であるのに対し、第三章は単体で 137 ページ分である。*Nyāyabindu* では、第一章が全 21 スートラ、第二章が全 47 スートラからなるのに対し、第三章は全 140 スートラから構成される。論証に関する多岐にわたる概念と、細分化された下位分類の全体を理解し体系化することは容易ではない。

ダルマキールティの自説がまとめられた *Pramāṇaviniścaya* は、入門書としての *Nyāyabindu* が後に著されたことも示すとおり、内容が難解であるうえ、分量としても大部というべき著作である。そのため、はじめから全面的に *Pramāṇaviniścaya* に頼って研究を行うことは現実的でない。まずは *Nyāyabindu* にもとづいて他者のための推理の全体像を把握し、そこから

個々の議論について *Pramāṇaviniścaya*, *Pramāṇavārttika* へと遡って検討していくことが有用な一つの方策であるように思う。以上をふまえ、筆者は *Nyāyabindu* およびその註釈書を主要資料として他者のための推理研究を行う。

### 3 *Nyāyabindu* およびその註釈書<sup>11)</sup>

*Nyāyabindu* は、ダルモータラ (*Dharmottara*, 八世紀頃) の *Nyāyabinduṭīkā* とともにサンスクリット語写本が現存することから、多数の校訂テキストおよび翻訳研究が発表されてきた。たとえば、両文献の校訂本として初めて出版された PETERSON 1889 や, STCHERBATSKY 1918, MALVANIA 1955 などが主な校訂テキストとして挙げられる。さらに翻訳研究では, BHATTACHARYA 1923–1925, STCHERBATSKY 1930, また比較的新しいものでは WAYMAN 1999 (*Nyāyabindu* のみ) の英訳が参照可能である。英訳以外では中村 1981, 木村 1987 の和訳, 王 1987, 王 2020 の中国語訳などがあり, ほかにも複数の言語による翻訳研究が行われている。

*Nyāyabindu* に対する主な註釈書は, 上記のダルモータラ註のほかにも, ヴィニータデーヴァ (*Vinītadeva*, 九世紀頃) による *Nyāyabinduṭīkā* やカマラシーラ (*Kamalaśīla*, 八世紀頃) の *\*Nyāyabindupūrvapakṣasaṃkṣipta* がある<sup>12)</sup>。これらの註釈書のうち, ダルモータラ註に対しては復註も著されており, ドウルヴェーカミシュラ (*Durvekamiśra*, 十一世紀頃) の *Dharmottarapradīpa*, マッラヴァーディン (*Mallavādin*, 九世紀頃) の *Dharmottaraṭīpanaka*<sup>13)</sup>, 著者不明の *Nyāyabinduṭīkāṭīpanī*, *Tātparyanibandhanaṭīpanaka* の四本が現存している。MALVANIA 1955 は *Nyāyabindu* とダルモータラ註を含む *Dharmottarapradīpa* の校訂テキストを, 矢板 2005 は *Dharmottaraṭīpanaka* の校訂テキストをそれぞれ発表した。このように長い研究の蓄積があり, 復註にいたるまで参照可能な資料は充実しているが, *Dharmottarapradīpa* と *Dharmottaraṭīpanaka* にはまったく現代語訳がまだ存在しない。これらの復註の翻訳は *Nyāyabindu* 研究の次の段階への進展に向けて重要な仕事の一つであると言えよう。

こうした諸註釈書の中で、筆者が主要資料とするのはダルモータラの *Nyāyabinduṭīkā* とドウルヴェーカミシュラの *Dharmottarapradīpa* である。これらは他の註釈書に比べ、より詳細な解説が施されており、自註がなくスートラのみで構成される *Nyāyabindu* の理解に有用であると考え。ただし、ダルモータラは独特の解釈を展開することも多く、ダルマキールティの意図に対して穏当と思しき見解を示すヴィニータデーヴァ註<sup>14)</sup>との比較は不可欠である。よって、*Nyāyabindu*、ダルモータラ註、*Dharmottarapradīpa* のサンスクリット語校訂テキストおよび訳註の作成を基盤としつつも、その成果をヴィニータデーヴァ註や *Dharmottaraṭīpanaka* と比較し、ダルモータラの解釈の特徴や後代の評価を明確にすることが望ましい。

#### 4 一次資料の状況と校訂の方針

つぎに、前項で挙げた三つの主要文献に関する一次資料の状況と校訂の方針について報告する。*Nyāyabindu* およびダルモータラ註の校訂テキストのうち、最も多くの写本を参照し、従来の諸刊本の不備を改善した MALVANIA 1955 は、現在標準的なテキストとして広く用いられている。しかし、写本を確認しながら読み進めていけば、*Nyāyabindu* 本文にさえ修正の余地は残されている。

まず *Nyāyabindu* およびダルモータラ註の現存写本は、以下の五本が確認されている（A～D は貝葉、E は紙写本）。

- A Kambhāt Manuscript. Śāntinātha Jain Bhaṇḍāra. No. 183.
- B Bombay Branch of the Royal Asiatic Society.
- C Jaisalmer Manuscript. Jaisalmer Jain Bhaṇḍāra. No. 364.
- D Jaisalmer Manuscript. Jaisalmer Jain Bhaṇḍāra. No. 376/1 (NB), 376/2 (NBṬ).
- E Pāṭaṇa Manuscript. Pāṭaṇa Jain Bhaṇḍāra. No. 6681.

MALVANIA 1955 が参照しているのは A～D の四本である。筆者が参照可能

な写本は D, E の二本 であるため, A ~ C については MALVANIA の註から異読情報を得るしかない. そのため現在は, D 写本および E 写本, その他の諸刊本, チベット語訳を参照しながら MALVANIA 1955 を修正するかたちで校訂作業を進めている. MALVANIA 1955, i-ii によれば, 上記の写本のうち, A 写本と B 写本がそれぞれ異なる系統に属しており, C 写本は A 写本, D 写本は B 写本に近い読みを示しているという. ただし, D 写本の異読には註記漏れが散見され, なかにはその異読が適切な読みを保持している場合もある. C 写本と D 写本に関しては, 協力者に異読情報の提供を受けた旨の記述があり, 校訂者自身が写本を直接参照していないものと考えられる.

つづいて, *Dharmottarapradīpa* の写本は, Rāhula Sāṅkrīyāyana がチベットで発見した一本のみが現存する. Sāṅkrīyāyana が撮影しゲッティンゲン大学図書館が所蔵する画像と, Giuseppe Tucci が撮影した画像とが参照可能である. なお, MALVANIA が参照したのは前者である.

- Göttingen Collections of Buddhist Sanskrit Text Found by Rāhula Sāṅkrīyāyana in Tibet. No. Xc 14/17–19.<sup>17)</sup>
- Giuseppe Tucci's Collection. No. MT37–MT39 (H01–06, H12–17).<sup>18)</sup>

撮影された写本自体は同一であるが, この二つの画像は状態が大きく異なるため, 両者を参照することでより精度の高いテキストが作成可能となる. また, いずれの画像にも写本の表裏を誤って撮影したフォリオが存在する. たとえば, 第三章における MALVANIA 1955: 161 の脱落箇所 (Ms 60b) はそのケースにあたるが, トウッチ・コレクションの画像にもとづく KELLNER 2008 のテキストによって補完される. トウッチ・コレクションにも同様のフォリオ (Ms 32a) があるが, この箇所は反対にゲッティンゲン大学所蔵の画像によって確認できる.

前述のとおり, *Nyāyabindu* の復註にはまとまった現代語訳がなく, *Dharmottarapradīpa* の翻訳を精確に行うことも重要な課題である. また, ダルモータラ註については優れた研究が多数出版されているため, 筆者の校訂・翻訳作業では, 可能な限り *Dharmottarapradīpa* の読みや解釈を活か

す方針をとる。ただ、*Dharmottarapradīpa* は写本が一本しか現存せず、チベット語訳も存在しないため、校訂は時に困難な状況に陥る。そのような場合に重要な資料となるのが *Pramāṇaviniścayaṭīkā* である。*Pramāṇaviniścayaṭīkā* は、*Nyāyabinduṭīkā* の著者と同じダルモータラによる *Pramāṇaviniścaya* の註釈書であり、ドウルヴェーカミシュラが *Dharmottarapradīpa* の中で多くの引用あるいは転用を行う著作である。これまではチベット語訳しか参照できなかったが、2020 年末に第三章のディプロマティックエディション (HUGON 2020) が公開された。これにより、*Dharmottarapradīpa* の写本がそのままでは解読できない場合に、*Pramāṇaviniścayaṭīkā* の関連箇所を根拠に校訂を行うことが可能となった。両文献の平行箇所をここで逐一挙げることはできないが、たとえば第三章の冒頭から、ドウルヴェーカミシュラは *Pramāṇaviniścayaṭīkā* と類似の表現をもって註釈を行っている。

### (1) *Nyāyabindu* 3. 1 に対するダルモータラの註釈

NBṬ 150,1-3: svārthaparārthānumānayoḥ svārthaṃ vyākhyāya parārthaṃ vyākhyātukāma āha — **trirūpaliṅgākhyānam** iti. (自己のための推理と他者のための推理という両者のうちで、自己のための [推理] を詳述してから、他者のための [推理] を詳述しようとして [ダルマキールティは] 「**三つの特質をもつ論証因を表示するものである**」と言う。)

### (2) 上記 (1) に対するドウルヴェーカミシュラの註釈

DhPr 150,13-14: trirūpaṃ liṅgaṃ jñātam api vaktum aviduṣo bālasya vyutpādanārthaṃ trirūpaliṅgākhyānalakṣaṇaṃ yat parārtham anumānam uktam, tad vyākhyātuṃ **svārthetyādīnā** prastauti. (三つの特質をもつ論証因がすでに知られているとしても、[その論証因] を述べることを知らない思慮を欠く者に詳説することを目的として、他者のための推理は「**三つの特質をもつ論証因を表示するものである**」という定義的特質を有するものであると述べられた。その [他者のための推理] を詳述しようとして、「**自己のための**」云々と語り始めるのである。)

### (3) *Pramāṇaviniścaya* 3.1 に対するダルモータラの註釈

PVinT 1.1-3: trirūpaṃ liṅgaṃ jñātam api vaktum aviduṣo bālasya vyutpādanārthaṃ parārthānumānaṃ trirūpaliṅgākhyānalakṣaṇaṃ prastotum āha. (三つの特質をもつ論証因がすでに知られているとしても, [その論証因] を述べることを知らない思慮を欠く者に詳説することを目的として, 他者のための推理は「三つの特質をもつ論証因を表示するものである」という定義的特質を有するものであると, 語り始めようとして [ダルマキールティ先生は] 述べる.)

現在作成中の校訂テキストには以上のような平行箇所を註記しており, これが完成したあかつきには *Pramāṇaviniścayaṭīkā* 研究にとっても有用な資料となるであろう。こうした関連文献における平行箇所の同定も本研究の重要な課題の一つである。

## 5 註釈者ドウルヴェーカミシュラ

ドウルヴェーカミシュラの解釈を重視するにあたり, 彼の著作や人物像について触れておきたい。ドウルヴェーカミシュラの著作で現存するのは, *Dharmottarapradīpa* と *Hetubinduṭīkāloka*<sup>19)</sup> の二本のみである。よって, *Hetubinduṭīkāloka* は, *Dharmottarapradīpa* の解読に際し, ドウルヴェーカミシュラに特有の表現などを参照できる唯一の資料となる。ドウルヴェーカミシュラ自身に関してはチベットでの伝承が一切残っていないため, 本人の著作から得られる情報が頼りとなる。*Hetubinduṭīkāloka* の校訂者である SANGHAVI 1949, xii-xiii によれば, ドウルヴェーカミシュラに関する情報は, ジターリ (Jitāri, 十一世紀頃) の直弟子であること, 「~ミシュラ」という名前からミティラーのブラーフマナ出身の人物であること, そして, 貧しい生まれであること, という点が明らかになっている<sup>20)</sup>。こうした情報の一部は, *Dharmottarapradīpa* と *Hetubinduṭīkāloka* の廻向偈から読み取ることができる。

**Dharmottarapradīpa (MALVANIA1955,257; Ms 84a4-6) :**

guror jītāreḥ abhigamya dhīdhanam<sup>21)</sup> mayā hi ṭikā vivṛtā paṭiyasī |  
 kutūhalenāpi tad atra yujyate nirīkṣaṇam sādhu vivekaśālinām<sup>22)</sup> ||<sup>23)</sup>  
 ajño janas tyajati labdham apīha ratnam kācena tulyam iti cintya ca  
 labhyate<sup>24)</sup> 'pi |  
 etāvataiva tad alaṃkaraṇam na kiṃ syāt kiṃ vādareṇa tad upādadate  
 na dhanyāḥ ||<sup>25)</sup>  
 imaṃ nibandham vidhivad vidhāya mayā hy avāptam<sup>26)</sup> sukṛtam  
 kathamcit |  
 ihaiva janmany atha tena sattvā anuttaram bodhim<sup>27)</sup> avāpnvantu ||<sup>28)</sup>  
 paṇḍitadurvekamiśraviracitadharmottarapradīpo nāma nibandhaḥ  
 samāptaḥ ||

私は、ジターリ先生の知識という財産に近づいて、とても明晰な〔ダルモータラの〕『ティーカー』を註釈した。この〔註釈〕には、好奇心にもとづくもののだとしても、思慮深い人々の、そのよき考察が相応しい。無知な人は、この〔著作／世〕において、宝（＝知識）を獲得したとしても〔そうとは知らずに〕捨ててしまう。しかし、その一方で、「水晶に似ている」と考えて手にするならば、この限りにおいて、それ（宝）は装飾品になり得る。あるいは、優れた人であるならば、それ（宝）を敬意をもって受け入れるであろう。

私は、規則に従ってこの著作を作成し、どうにかしてよく作り上げた／善行を成し遂げた。そうではあっても、他ならぬこの現世において、それ（この著作）によって、衆生たちが最上の菩提を獲得しますように。

ドウルヴェーカミシュラ先生によって著された『ダルモータラ・プラディーパ』なる著作、終わる。

**Hetubinduṭīkāloka = Arcaṭāloka (SANGHAVI 1949,411; Ms<sup>29)</sup> 70b2-4) :**

dāridryaduḥkhād abhiyogamātrād<sup>30)</sup> viśuddhabuddher virahād abodhāt |  
 nāstīha sūktaṃ mama yat punaḥ syāt guror jītāreḥ sa khalu prasādaḥ ||<sup>31)</sup>  
 kutūhalenaiva yadṛcchayā vā mātsaryato doṣajighṛkṣayā vā |<sup>32)</sup>

•••• svata<sup>33)</sup> eva rūpaṃ vijñāsyate 'syeti na varṃayāmaḥ ||<sup>34)</sup>  
 kṛto 'yam arcaṭāloko nibandho bālabāndhavaḥ |  
 yatra mūrtir ivādarśe dṛśyate svaparasthitiḥ ||  
 parārtham uddiśya yathārtham arcaṭaṃ vivṛṇya puṇyaṃ yad upārjitaṃ  
 mayā |

nihantu tenāvāraṇāni vidviṣo jano 'ntarāyeṇa vinaiva sarvathā ||<sup>35)</sup>  
 samāptaś cārcaṭāloko<sup>36)</sup> nibandhaḥ | kṛtir iyaṃ paṇḍitadurvekamisrasyeti ||  
 [私は] 貧しさに苦しみ、ただ努力のみで明瞭な知を欠き、愚かである  
 から、この [著作] には、私の雄弁さ／美しい言葉はない。しかし、も  
 しそのようなものがあるとすれば、それはたしかにジターリ先生の  
 恩寵である。

好奇心のみによって、あるいは自発的に／偶然に、あるいは羨望／物惜  
 しみから、あるいは過失を取り除かんと望んで、……<sup>37)</sup> まさに自ずから、  
 この [著作] の姿かたちが知られるだろう。だから、私たちは色づけし  
 ない。

この『アルチャタ・アーローカ』<sup>38)</sup> という、愚か者の親類である著作  
 が著された。その註釈（鏡）には、影像のごとくに自他の定説が現れる。  
 私は、他者のために、内容のとおりアルチャタ [の『ティーカー』]  
 を註釈して、福德を獲得した。人々が、その [福德] によって、まったく  
 覆いなしに、敵の諸々の妨げを完全に打ち払いますように。

そして、著作『アルチャタ・アーローカ』終わる。これは、ドウルヴェー  
 カミシュラ先生の作品である。

また、*Hetubinduṭīkāloka* の中で、ドウルヴェーカミシュラの著作が  
*Dharmottarapradīpa* と *Hetubinduṭīkāloka* のほかに四本言及されてい  
 る (SANGHAVI 1949, xii)。残念ながらそれらはすべて散逸し、現存する  
*Dharmottarapradīpa* と *Hetubinduṭīkāloka* もチベット語への翻訳は行われて  
 いない。今後の翻訳研究を通して、ドウルヴェーカミシュラの特徴をより明  
 瞭にしていくことも重要な課題といえよう。

## 6 Nyāyabindu における他者のための推理

ここまで資料に関する情報を中心に述べてきたが、最後に章の具体的な内容を確認しておきたい。Nyāyabindu 第三章は、以下のような他者のための推理の定義セクションによって開始される<sup>39)</sup>。

(1) trirūpaliṅgākhyānaṃ parārtham anumānam. (2) kāraṇe kāryopacārāt. (3) tad dvididham, (4) prayogabhedāt: (5) sādharṃyavad vaidharṃyavac ceti. (6) nānāyor arthataḥ kaścīd bhedaḥ (7) anyatra prayogabhedāt. (NB 3.1-7)

(1) 他者のための推理とは、三つの特質（肯定的随伴・否定的随伴・主題所属性）をもつ論証因を表示するものである。(2) 原因 [である言葉] に対して、結果 [である推理] が転義的に表現されるから。(3-4) それ（他者のための推理）は、論証式の区別にもとづいて二種である。(5) 〈同じ属性をもつこと〉を有する [論証式] と 〈異なる属性をもつこと〉を有する [論証式] とである。(6-7) これら二つ [の他者のための推理] には、論証式の区別よりほかに、事柄にもとづいては、いかなる区別もない。

この定義セクションからもわかるように、他者のための推理とは、すなわち論証式のことである。ダルマキールティ以降、仏教論理学派では二支論証式が用いられる。二支論証式には二種類あり、〈同じ属性をもつこと〉を有する論証式、つまり「論証因があれば論証対象がある」という関係を述べる論証式と、〈異なる属性をもつこと〉を有する論証式、つまり「論証対象がなければ論証因がない」という関係を述べる論証式とに分類される。ダルモータラ註はそれぞれの論証例を以下のように挙げる。

### (1) 〈同じ属性をもつこと〉を有する論証式

NBṬ 152,11-12: yat kṛtakam tad anityam, yathā ghaṭaḥ. tathā ca kṛtakaḥ śabda ...

【遍充】およそ作られたもの、それは無常なものである。壺のように。【主

【主題所属性】音声も同様に<sup>40)</sup>作られたものである。) )

## (2) 〈異なる属性をもつこと〉を有する論証式

NBT 152,13: yan nityaṃ tad akṛtakāṃ dṛṣṭam, yathākāśam. śabdā tu kṛtaka ...

【遍充】およそ常住なもの、それは作られたものでないということが経験される。虚空のように。【主題所属性】しかし、音声は作られたものである。) )

一つ目の〈同じ属性をもつこと〉を有する論証式は、遍充支分において、〈論証因が同類のみに存在していること〉、すなわち因の三相の第二相を述べている。二つ目の〈異なる属性をもつこと〉を有する論証式の遍充支分は、〈論証因が異類に決して存在していないこと〉、すなわち因の三相の第三相を述べるものである。そして、いずれの論証式も主題所属性では第一相を述べる。また、これら二つの遍充支分は対偶の関係になっており、どちらか一方を述べればもう一方が含意されるため、片方の論証式を述べれば論証因の特質がすべて述べられたことになる。それにより、他者のための推理＝論証式が三つの特質をもつ論証因を表示するものである、という定義が成立するのである。

以上の定義セクションに続き、第三章では大きく分けて五つの題材が扱われる。

- (1) 論証式 (prayoga)
- (2) 主張命題・疑似主張命題 (pakṣa, pakṣābhāsa)
- (3) 疑似論証因 (hetvābhāsa/sāadhanābhāsa)
- (4) 実例・疑似実例 (dṛṣṭānta, dṛṣṭāntābhāsa)
- (5) 論難・疑似論難 (dūṣaṇa, dūṣaṇābhāsa)

このうち、筆者は論証式と実例を重点的な考察対象としている。論証例を確認したとおり、論証に際して直接現れる要素は論証式、すなわち実例を含む

遍充支分と主題所属性であり、まずこれらの理解は欠かせないであろう。また、(2) および (3) については比較的充実した二次資料がすでに存在するため<sup>41)</sup>、先行研究の少ない(1) および (4) の解明を優先すべきと考える。

これまでダルマキールティの論証式そのものを主題とする研究はほとんど行われなかったが、稲見 2018 によりダルマキールティ以降の論証式の特徴およびディグナーガ以来の通時的な変遷を詳しく知ることができるようになった。その一方で、以下に概略を示した論証式セクションでは、三種の論証因それぞれに応じた論証式が例示されるが、こうした下位分類の詳細な研究はまだ着手されていない<sup>42)</sup>。

### 論証式セクション (ss.8–33) 概略

- 1 〈同じ属性をもつこと〉を有する論証式の例示
  - 1.1 〈同じ属性をもつこと〉を有する、非認識因の論証式
  - 1.2 〈同じ属性をもつこと〉を有する、本質因の論証式
  - 1.3 〈同じ属性をもつこと〉を有する、結果因の論証式
- 2 〈異なる属性をもつこと〉を有する論証式の例示
  - 2.1 〈異なる属性をもつこと〉を有する、非認識因の論証式
  - 2.2 〈異なる属性をもつこと〉を有する、本質因の論証式
  - 2.3 〈異なる属性をもつこと〉を有する、結果因の論証式
- 3 〈同じ属性をもつこと〉を有する論証式による否定的随伴の間接的理解
- 4 〈異なる属性をもつこと〉を有する論証式による肯定的随伴の間接的理解
- 5 間接的理解の根拠：本質を介した必然関係

つぎに実例に関する先行研究としては STEINKELLNER 2004 が挙げられる。この研究はダルマキールティ初期の *Pramāṇavārttika* および *svavṛtti* にもとづく研究であり、自己のための推理章での実例概念をめぐる議論が検討されている。よって、他者のための推理の枠組みで説かれる実例は未検討の領域であった。同じ推理論に属する要素として、両者は決して別の概念に切り分けられるものではないが、自己のための推理と他者のための推理では、諸概念の定義やその役割の提示方法は異なる。

また、以下に挙げるような疑似実例の下位分類についても、BARCELOWICZ 2006 によってジャイナ教の分類との詳細な比較研究が行われるものの、仏教論理学派内部の展開や論師ごとの解釈の比較という観点からはまだ検討されていなかった<sup>43)</sup>。

### 実例・疑似実例セクション (ss.121–136) 概略

- 1 実例は独立した論証の必須要素ではない
- 2 論証因の特質 = 実例の特質<sup>44)</sup>
- 3 疑似実例
  - 3.1 〈同じ属性をもつこと〉による実例の過失の例示
    - 3.1.1 論証されるべき属性を欠く実例
    - 3.1.2 論証する属性を欠く実例
    - 3.1.3 論証されるべき属性と論証する属性という両者を欠く実例
    - 3.1.4 論証されるべき属性が疑わしい実例
    - 3.1.5 論証する属性が疑わしい実例
    - 3.1.6 論証されるべき属性と論証する属性という両者が疑わしい実例
    - 3.1.7 肯定的随伴をもたない実例
    - 3.1.8 肯定的随伴が明示されない実例
    - 3.1.9 肯定的随伴が逆になっている実例
    - 3.1.10 〈同じ属性をもつこと〉による実例の過失のまとめ
  - 3.2 〈異なる属性をもつこと〉による実例の過失の例示
    - 3.2.1 論証されるべき属性が排除されない実例
    - 3.2.2 論証する属性が排除されない実例
    - 3.2.3 論証されるべき属性と論証する属性という両者が排除されない実例
    - 3.2.4 論証されるべき属性の排除が疑わしい実例
    - 3.2.5 論証する属性の排除が疑わしい実例
    - 3.2.6 論証されるべき属性と論証する属性という両者の排除が疑わしい実例
    - 3.2.7 否定的随伴をもたない実例
    - 3.2.8 否定的随伴が明示されない実例
    - 3.2.9 否定的随伴が逆になっている実例

### 3.3 疑似実例のまとめ

以上の論証式および実例・疑似実例セクションで説かれる下位分類に関しては、*Pramāṇavārttika* や *Pramānaviniścaya* よりも *Nyāyabindu* の記述が充実している。またいずれの概念においても、論証因との関連、とりわけ本質を介した必然関係 (*svabhāvavapratibandha*) の重要性が強調される。片岡 2012 にまとめられるように、本質を介した必然関係については先行研究における長い議論がある。他者のための推理という観点から本質を介した必然関係をめぐるダルマキールティの見解を検討することもまた重要な課題の一つといえよう。

## 7 おわりに

以上報告したように、筆者は *Nyāyabindu*, ダルモットタラの *Nyāyabinduṭīkā*, *Dharmottarapradīpa* を主要資料として他者のための推理研究を進めている。主要資料の校訂・訳註作成を基盤とし、他者のための推理の体系的な理解を目指すとともに、ダルマキールティの他の著作もふまえ、論証式および実例に関する重点的な考察を行う。そうした筆者の研究に関して、本稿では、これまでの先行研究の状況や今後の課題、参照可能な一次資料の情報をまとめ、現時点での成果の一部を提示した。第2項でも述べたように、これまでダルマキールティの論理学研究においては、論証において最も重要な論証因の解明が重視されてきた。論証式の提示そのものに関わる概念や、論証因をより確かなものとする実例の研究はあまり行われなかったが、その前提となる論証因に関する研究の蓄積がある今だからこそ、他者のための推理研究に取り組むことが可能となった。また、当然ながら論証式の諸要素の機能は密接に関わりあっている。本研究が他者のための推理の全体像を明らかにすることにより、論証因を対象とした既往の研究成果との有機的連関が期待できるだろう。

## 略号と参考文献

## 〈略号・記号〉

- Ms manuscript.  
 ed. edition.  
 • lost akṣara.  
 conj. conjectured.  
 em. emended.  
*Italic* conjectured.

## 〈一次文献〉

- DhPr *Dharmottarapradīpa* (Durvekamiśra): *Pandita Durveka Miśra's Dharmottarapradīpa. Being a Sub-commentary on Dharmottara's Nyāyabindutīkā, a Commentary on Dharmakīrti's Nyāyabindu*. Ed. Dalsukhbhai MALVANIA. Patna: K. P. Jayaswal Research Institute, 1955.
- HBṬĀ *Hetubindutīkāloka* (Durvekamiśra) : *Hetubindutīkā of Bhatta Arcata with the Sub-commentary Entitled Āloka of Durveka Miśra*. Eds. Pandit Sukhalaji SANGHAVI and Muni Sri JINAVIJAYA. Baroda: Oriental Institute, 1949.
- NB *Nyāyabindu* (Dharmakīrti) : see DhPr. Tibetan translation. D 4213, P 5711.
- NBṬ *Nyāyabindutīkā* (Dharmottara) : see DhPr. Tibetan translation. D 4231, P 5730.
- PVinṬ *Pramānaviniścayatīkā* (Dharmottara) , chapter 3: *Dharmottara's Pramānaviniścayatīkā, chapter 3, Diplomatic Edition*. Ed. Pascale HUGON. Beijing–Vienna: China Tibetology Publishing House & Austrian Academy of Sciences Press, 2020. Tibetan translation. D 4229, P 5727.

## 〈二次文献〉

BALCEROWICZ, Piotr

- 2006 “Implications of the Buddhist–Jaina dispute over the fallacious example in *Nyāya-bindu* and *Nyāyāvatārā-vivṛti*.” In *Studies in Jaina History and Culture, Disputes and Dialogues*, ed. Peter FLÜGEL, 117–153. Oxford: Routledge.

BANDURSKI, Frank

- 1994 “Übersicht über die Göttinger Sammlungen der von Rāhula Sāṅkṛtyāyana in Tibet aufgefundenen buddhistischen Sanskrit-Texte (Funde buddhistischer Sanskrit-Handschriften III).” In *Untersuchungen zur buddhistischen Literatur*, ed. Frank BANDURSKI *et al.*, 9–126. Göttingen: Vandenhoeck und Ruprecht.

BHATTACHARYA, Harisatya

- 1923 “‘Nyaya-vindu’ with Dharmottaracharyya’s Commentary.” *The Maha-Bodhi* 31: 197–200, 215–223, 262–271, 300–305, 356–360, 391–396, 420–426, 463–469.
- 1924 “Nyaya Vindu with Dharmottaracharyya’s Commentary.” *The Maha-Bodhi* 32: 27–31, 65–70, 105–111, 183–190, 227–234, 287–291, 330–335, 400–407, 455–461, 520–526, 573–579, 622–628.
- 1925 “Nyaya Vindu with Dharmottaracharyya’s Commentary.” *The Maha-Bodhi* 33: 29–37.

FRAUWALLNER, Erich

- 1954 “Die Reihenfolge und Entstehung der Werke Dharmakīrti’s.” In *Asiatica: Festschrift Friedrich Wellner zum 65. Geburtstag*. Leipzig: O. Harrassowitz, 142–154.

HUGON, Pascale

- 2020 See PVinṬ.

HUGON, Pascale and TOMABECHI Tōru

- 2011 *Dharmakīrti’s Pramāṇaviniścaya, chapter 3*. Beijing–Vienna:

China Tibetology Publishing House & Austrian Academy of Sciences Press.

INAMI Masahiro 稲見正浩

- 1988 「ダルマキールティの pakṣābhāsa 説」『印度学仏教学研究』37(1): 130-133.
- 2018 「仏教論理学派の論証式」『印度学仏教学研究』67(1): 366-359.
- 2021 「Pramāṇavārttikālaṅkāra における Pramāṇavārttika 詩頌の所在一覽」『プラジュニャーカラグプタ研究』1: 39-66.

IWATA Takashi 岩田孝

- 1993 「『知識論決択』(Pramāṇaviniścaya) 第三章(他者の為の推論章) 和訳研究 ad v. 1: 他者の為の推論の定義の svadṛṣṭa について(1)」『東洋の思想と宗教』10: (21)-(48) .
- 2004 “The Negative Concomitance (*vyatireka*) in the Case of Inconclusive (*anaikāntika*) Reasons.” *The Role of the Example (dṛṣṭānta) in Classical Indian Logic*. Wiener Studien zur Tibetologie und Buddhismuskunde, No. 58: 91-134.

KATAOKA Kei 片岡啓

- 2012 「svabhāvapratibandha 研究の見取り図」『インド論理学研究』4: 163-204.

KELLNER, Birgit

- 2008 “A Missing Page from Durvekamiśra’s *Dharmottarapradīpa* on *Nyāyabindu* 3.15 and 3.18 in Context.” In *Sanskrit Texts from Giuseppe Tucci’s Collection, Part 1*, ed. Francesco SFERRA, 401-422. Roma: Istituto Italiano per L’Africa e L’Oriente.

KIMURA Toshihiko 木村俊彦

- 1987 『ダルマキールティ宗教哲学の研究〔付・ダルモータラ釈『ニャーヤ・ビンドウ』和訳〕』木耳社.

KODAMA Eiko 児玉瑛子

- 2021 「ダルモータラの dṛṣṭāntābhāsa 論: apradarśitānvaya/

- apradarsitavyatireka の場合」『印度學佛教學研究』69(2): 834-831.
- 2022a “Technical Terms Relating to *prayoga* in the *Nyāyabindu* and Its Commentaries.” 『印度學佛教學研究』70(3): forthcoming.
- 2022b 「他者のための推理における実例の役割」『智山学報』71: (1)-(17) .
- LASIC, Horst
- 2007 “Tabo *tshad ma* materials.” In vol.1 of *Pramāṇakīrtiḥ: Papers Dedicated to Ernst Steinkellner on the Occasion of His 70th Birthday*, ed. B. KELLNER *et al.*, 489-491. Wien: Arbeitskreis für tibetische und buddhistische Studien, Universität Wien.
- MIYASAKA Yūshō 宮坂宥勝
- 1970 「ダルマキールティの生涯と作品（上）」『密教文化』93: 104-64.
- MIYO Mai *et al.* 三代舞他
- 2022 三代舞・藤本庸裕・児玉瑛子・道元大成・須藤龍真・野武美弥子・岩田孝 『『ニヤーヤビンドウ』における認識論・論理学の体系：仏教用語の現代基準訳語集および定義の用例集』山喜房佛書林.
- MALVANIA, Dalsukhbhai
- 1955 See DhPr.
- NAKAMURA Hajime 中村元
- 1981 「インド論理学の理解のために I ダルマキールティ『論理学小論』(Nyāya-bindu)」『法華文化研究』7: 1-178.
- NORIYAMA Satoru 乘山悟
- 1994 「ダルマキールティの『推論式の分類』: Pramāṇavārttikasvavṛtti 研究 (I) (kk. 186-189ab)」『龍谷大学大学院研究紀要』15: 1-14.
- PETERSON, Peter
- 1889 *The Nyāyabinduṭīkā of Dharmottara Ācārya to which is added The Nyāyabindu*. Bibliotheca Indica 128. Calcutta: Asiatic Society of

Bengal.

ONO Motoi 小野基

- 1986 「ダルマキールティにおける主張命題の定義について」『印度學佛教學研究』34(2): 109-112.
- 1987 「ダルマキールティの疑似論証因説」『仏教学』21: 1-21.
- 2000 「Pramāṇaviniścaya における不共不定因説: Pramāṇaviniścaya 第3章疑似論証因節・不共不定因の項 (v. 83-84) テキスト校訂と和訳」『戸崎宏正博士古希記念論集インドの文化と論理』九州大学出版会, 289-317.
- 2005 「『他者のための推理』(parārthānumāna) の概念の変遷: インド仏教論理学の中世的展開の一断面」前田專學『中世インドの学際的研究』(平成14～16年度科学研究費補助金(基盤研究(A)(2))研究成果報告書(課題番号14201003)), 171-183.
- 2012 「インド仏教論理学における parārthānumāna 概念の変遷: その起源をめぐって」『印度学仏教学研究』60(2): 1012-1007.

PRETS, Ernst

- 1999 “Dharmakīrti’s Refutation of *kevalānvayin* and *kevalavyatirekin* Reasons in the Light of the Naiyāyikas’ View.” In *Dharmakīrti’s Thought and Its Impact on Indian and Tibetan Philosophy: Proceedings of the Third International Dharmakīrti Conference Hiroshima, November 4–6, 1997*, ed. Shōryū KATSURA, 333-340. Wien: Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften.

SANGHAVI, Sukhlalji

- 1949 See HBTĀ.

SFERRA, Francesco

- 2008 *Sanskrit Texts from Giuseppe Tucci’s Collection, Part I. Manuscripta Buddhica 1*, Roma: Istituto italiano per L’Africa e L’Oriente.

SHIRASAKI Kenjō 白崎顕成

- 1978 「Jitāli と Durvekamiśra」『佛教論叢』22: 141-146.

STCHERBATSKY, Theodore

- 1918 "Nyāyabindu: Buddijskij učebnik" logiki sočinenie Darmakirti i tolkovanie na nego Nyāyabinduṭīkā sočinenie Darmottary, sanskritiskij tekst" szdak" s" vvedeniem" i priměčanijami." Gerold. Reprint: Bibliotheca Buddhica VII. Tokyo: Meicho-fukyū-kai, 1977.
- 1930 *Buddhist Logic*. Vol. II. Leningrad: the Academy of Sciences of the U.S.S.R.

STEINKELLNER, Ernst

- 1979 *Dharmakīrti's Pramāṇaviniścayaḥ Zweite Kapitel: Svārthānumānam, Teil II: Übersetzung und Anmerkungen*, Wien: Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften.
- 2004 "The Early Dharmakīrti on Purpose of Examples." *The Role of the Example (dṛṣṭānta) in Classical Indian Logic*. Wiener Studien zur Tibetologie und Buddhismuskunde, No. 58. Wien: 225–250.
- 2007 *Dharmakīrti's Pramāṇaviniścaya Chapters 1 and 2*. Beijing–Vienna: China Tibetology Publishing House & Austrian Academy of Sciences Press.

TANI Tadashi 谷貞志

- 1982 「Pramāṇaviniścaya. III 解釈の問題 [1]」『高知工業高等専門学校学術紀要』18: 11–25.
- 1988 "The Problem of Interpretation on *Pramāṇaviniścaya* III ad vv. 26–27: with the Text and a Translation." 『高知工業高等専門学校学術紀要』28: 1–16.
- 1989 "The Problem of Interpretation on *Pramāṇaviniścaya* III ad vv. 33: with the Text and a Translation." 『高知工業高等専門学校学術紀要』31: 1–16.

TSUKAMOTO Keishō *et al.* 塚本啓祥他

- 1990 塚本啓祥・松長有慶・磯田熙文『梵語仏典の研究 IV 論書篇』平楽寺書店.

TOSAKI Hiromasa 戸崎宏正

- 1984 「Kamalaśīla 作 *Nyāyabindupūrvapakṣaṣaṅkṣipta* : 現量章のテキストと和訳」『インド古典研究 VI 神秘思想論集』成田山新勝寺, 477-493.
- 1986 「法称著『プラマーナ・ヴィニシュチャヤ』第一章現量(知覚)論の和訳(1)」『哲学年報』45: 1-8.
- 1988 「プラマーナヴィニシュチャヤとニャーヤビンドウ」『成田山仏教研究所紀要』11: 237-245.

WANG Sen 王森

- 1987 『《正理滴論》(譯自梵文本)』台北：中華電子佛典協會.

WANG Junqi 王俊淇

- 2020 『法称《正理滴论》与法上《正理滴论注》译注与研究』北京：中国社会科学出版社.

WATANABE Shoko 渡邊照宏

- 1970 「調伏天造・正理一滴論釋和譯」成田山新勝寺編『インド古典研究』1: 407-405.

WAYMAN, Alex

- 1999 *A Millennium of Buddhist Logic, Volume One*. Delhi: Motilal Banarsidass.

YAITA Hideomi 矢板秀臣

- 2005 『仏教知識論の原典研究：瑜伽論因明，ダルモッタラティッパナカ，タルカラハスヤ』成田山新勝寺.

## 註

- 1) 三代他 2022 による最新の研究は、*Nyāyabindu* の認識論・論理学の体系における主要術語の定義的用例を収集・分析した成果を発表した。当該研究の性格上、個々の概念に関する詳細な議論に深くは立ち入らないが、*Nyāyabindu* の体系の全体像や術語間の関係を整理されたかたちで一覧できるようになった。筆者もこのプロジェクトに参加し、自身の研究対象である論証式と実例・疑似実例に関する項目の執筆を担当した。

- プロジェクトメンバーからは、*Nyāyabindu* 研究に有用な資料や筆者の翻訳に対する修正案など、非常に多くの貴重な情報・助言をいただいた。ここに記して感謝申し上げる。
- 2) ダルマキールティの他の著作については宮坂 1970；塚本 1990 などを参照せよ。
  - 3) ダルマキールティの著作の成立順序については FRAUWALLNER 1954 を参照せよ。また、*Pramāṇaviniścaya* と *Nyāyabindu* の関係は戸崎 1988 において、知覚章の比較という観点から論じられている。
  - 4) 本稿で使用する *Nyāyabindu* のストラ番号は MALVANIA 1955 にしたがう。STCHERBATSKY 1918 とはストラの数え方が異なる。
  - 5) *dvidvidhaṃ samyagiñānam, pratyakṣam anumānaṃ ceti.* (正しい認識は、知覚と推理という二種である。)
  - 6) *anumānaṃ dvidvidhā, svārthaṃ parārthaṃ ca.* (推理は、自己のための [推理] と他者のための [推理という] 二種である。)
  - 7) 他者のための推理において説かれる諸概念は、もともと論証 (*sādhana*) の構成要素として、いわゆる討論術の伝統に属していたが、ディグナーガによって推理論に統合され、正しい認識の体系に組み込まれた。その起源については小野 2012 を参照せよ。
  - 8) 偈文の数は稲見 2021 にしたがう。
  - 9) ただし、*Pramāṇaviniścaya*, *Nyāyabindu* 第三章との関連箇所は、*Pramāṇavārttika* 第一章、とくにダルマキールティの自註 *Pramāṇavārttikasvavṛtti* の中にも見出される。*Pramāṇavārttika* とその註釈書が他者のための推理に関しても非常に重要な資料であることに変わりはない。
  - 10) チベット語訳を用いた翻訳研究として、第一章は戸崎 1986 などの和訳、第二章は STEINKELLNER 1979 のドイツ語訳、第三章は岩田 1993 や TANI 1982 などの一連の研究があり、サンスクリット語テキストにもとづく翻訳研究に際しても大いに参考となる。
  - 11) 以下、*Nyāyabindu* および諸註釈書の校訂テキスト・翻訳研究については、主要なものとして塚本 1990 の出版以降に発表されたものを挙げる。1990 年以前の研究に関する詳細な情報は塚本 1990, 432-439 を参照せよ。

- 12) いずれもチベット語訳のみ参照可能。ヴィニータデーヴァ註は渡邊 1970 による和訳研究が、カマラシーラ註については戸崎 1984 の第一章校訂テキストおよび和訳研究がある。
- 13) 当該テキストに関する情報は矢板 2005,42-44 を参照せよ。
- 14) こうしたヴィニータデーヴァに対する評価については渡邊 1970: 243 を参照。
- 15) 写本画像の入手にあたって、D 写本は松岡寛子氏と三代舞氏、E 写本は野武美弥子氏のお力添えをいただいた。ここに記して感謝申し上げる。
- 16) Nyāyabindu の訳者は、優れた翻訳官として知られるゴクローツァーフ・ローデンシェーラプ (rNgog lo tsā ba Blo Idan shes rab, 1059-1109) と伝えられる。しかし LASIC 2007 によれば、当該の翻訳には問題が多く、実際にはヴィニータデーヴァ註と同じジナミトラ (Jinamitra)、ダーナシーラ (Dānaśīla)、イエシェーデ (Ye shes sde) が翻訳を行った可能性があるという。
- 17) ゲッティンゲン・コレクションについては BANDURSKI 1994 を参照。
- 18) コレクションの管理者である Francesco SFERRA 氏に画像をご提供いただいた。また、SFERRA 氏から画像の使用許可を得るにあたっては、倉西憲一氏にお力添えをいただいた。両氏に深く感謝申し上げます。トゥッチ・コレクションについては SFERRA 2008 を参照。
- 19) ダルマキールティの *Hetubindu* にはヴィニータデーヴァとアルチャタ (Arcaṭa, 八世紀頃) の註釈がそれぞれ著された。*Hetubinduṭīkāloka* はアルチャタ註に対するドウルヴェーカミシュラの復註である。
- 20) ジターリとドウルヴェーカミシュラの関係については白壽 1978 を参照せよ。
- 21) **dhīdhanam** ed. : dhīdhānam Ms
- 22) **vivekaśālinām** Ms : vivecakānām ed.
- 23) 韻律は vaṃśasthā.
- 24) **cintya ca labhyate** conj. : calāyate Ms, calāyate (cacalamānaso) ed.
- 25) 韻律は vasantatilakā.
- 26) **mayā hy avāptam** ed. : mayadāptam Ms

- 27) *anuttaraṃ bodhim* Ms : *anantaśambodhim* ed.
- 28) 韻律は *upendravajrā*.
- 29) 写本情報は *Dharmottarapradīpa* に同じ.
- 30) *-mātrād* ed. : *-mātryād/-mātyād?* Ms
- 31) 韻律は *upajāti*.
- 32) *-yā vā* add ed. : •• Ms
- 33) *svata* Ms : *ṣvata* ed.
- 34) 韻律は *upajāti*.
- 35) 韻律は *vaṃśasthā*.
- 36) *-rcaṭāloko* conj. : om. Ms
- 37) 写本が欠損している。韻律からは五音節分の脱落が想定される。
- 38) 当文献は *Hetubinduṭīkāloka* として知られるが、ドウルヴェーカミシュラ本人の記述にもとづけば *Arcaṭāloka* が正しい書名である。
- 39) この一連のストラに対するダルモータラとドウルヴェーカミシュラの註釈については、KODAMA 2022a, 三代他 2022: 172-173; 179-181 を参照。また、ディグナーガからダルマキールティおよびダルマキールティの著作間における他者のための推理の定義の変遷については小野 2005 を参照。
- 40) ダルモータラが挙げるこの論証例では、主題所属性の支分において「同様に」(*tathā*) という語が用いられる。当該の語をめぐるドウルヴェーカミシュラの見解については三代他 2022: 180, n.7, *i* を参照。
- 41) 主張命題・疑似主張命題および疑似論証因に関する先行研究の一部を挙げる。まず、主張命題・疑似主張命題に関しては小野 1986 や稲見 1988 による研究があるほか、TANI 1988 等が *Pramāṇaviniścaya* 第三章の主張命題セクションを訳出している。疑似論証因も同様に小野 1987 の研究、TANI 1989 等の翻訳研究がある。また、不確定因 (*anaikāntikahetu*) に関しては PRETS 1999, 小野 2000, IWATA 2004 等の研究がある。ダルマキールティの主要な著作で説かれる疑似論証因の対応関係は小野 1987: 14 の表を参照せよ。
- 42) *sādharmyavat* と *vaidharmyavat* の二種による大分類については、乗山

1994 による *Pramāṇavārttikasvayṛtti* にもとづく研究がある。

- 43) 肯定的随伴が明示されない実例 (*apradarśitānvaya*) と否定的随伴が明示されない実例 (*apradarśitavyatireka*) に関するダルモータラの解釈は児玉 2021 で検討した。
- 44) *Nyāyabindu* で最も長いストラによって、実例と論証因の関係が説かれる重要な箇所である。この *Nyāyabindu* 3.121-122 および *Pramāṇaviniścaya* 第二章を中心とした実例をめぐる議論は児玉 2022b において検討した。

(令和三年度科学研究費 (特別研究員奨励費) 21J12266 による研究成果の一部)